

母子像

久生十蘭

新潮社版



小説文庫

母　　子　　像

久　生　十　蘭

新　潮　社　版

—小説文庫—

★母子像★

定價 一三〇圓

一九五五年十月二十五日 發行
一九五六年六月十日 二刷

著 者 久 生 十 蘭

發行者 佐 藤 亮 一

印刷者 佐 藤 精 亮

發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局代表七一一(八)
振替 東京 八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。)

印刷 二光印刷株式會社・製本 大進堂製本所

(c) by J. HISAO 1955, TOKYO Printed in Japan

春	西	野	蝶	手	白	姦 かしまし	豫	母	
	林		の		雪			子	目
雪	圖	萩	繪	紙	姫		言	像	次
.....									
一八七	一六七	一四六	一〇三	七八	五九	四三	一九	五	

裝
幀

野
島

青
茲

母

子

像

母 子 像

進駐軍、厚木キャンプの近くにある聖ジョセフ學院中學部の初年級の擔任教諭が、受持の生徒のことで、地區の警察署から呼出しを受けた。

年輩の司法主任が、知的な顔をした婦人警官を連れて調室に入ってきた。

「お呼びたてして、どうも……」と軽く會釋すると、事務机を挟んで教諭と向きあふ椅子に掛けた。尾花が白い穂波をあげて揺れてゐるのが、横手の窓から見えた。

「こちらは少年相談所の補導さん……この警察は開店早々で、少年係がをりません。臨時に應援にきてもらつたので、事件を大きくしようといふのではありませんから、ご心配なく」

「司法主任がおっしゃつたやうに、私もはたいした事件だとは思つて居りません。廢棄した掩體壕のなかに、生憎と、進駐軍の器材が入つてゐた關係で、やかましいことをいつてをりますが、器材といつても、舊海軍兵舎の廢木なんですから、ちよつと火いちりをしたくらゐのことで、放火のどうのと騒ぐのはをかしいですわ……ですから、理由はなんだつていいので、あそこでギャングの眞似をしてゐたとか、キャンプ・ファイヤをやらうと思つたとか、書類の上

で、筋が通つてゐればすむことなのですが、石みたいに黙りこんでゐるので、計らひやうがなく困つてをりますの」

「私のはうでも、これ以上、とめておきたくないのですが、書類が完結しないので、返すわけにいかない……先生はクラスの擔任で、本人の幼年時代のこととも知つてゐられるさうですから、家庭關係と性向の概略をうかがつて、それを参考にして、適當な理由をこしらへてしまはうといふので……」

「いろいろとご配慮をいただきまして、ありがたうございました」

教諭が丁寧な頭をさげた。

「では、さつそくですが」

婦人警官が机の上の書類をひきよせた。

「和泉太郎、十六年二ヶ月、出生地サイパン島……聖ジョセフ學院中學部一年B組、アダムス育英資金給費生……父はサイパン支廳の氣象技師で、昭和十五年の死亡。母は南洋興發會社の内務勤務。震災による認定死亡、となつてをります……本人の方ですが、十六年二ヶ月で中學一年といふのは、どういふわけなのでせう。學齡にくらべて、進級が遅れてゐるやうですが」

「あの子供は終戦の年の十月に、震災孤兒といつしよにハワイに移されて、ホノルルの有志の後援で、八年制のグレード・スクール……日本の小學校にあたる學校に六年居て、今年の二十七年の春、學院の中學部に轉入してきました。學齡からいへば、三年級に入れるところす

が、日本語の教程が足りないものですから」

「アダムス育英資金といふのは」

「資金といふやうなものではありませんが、便宜上、さういふ名稱をつけてゐるので……アダムスといふのは、ハワイ生れの二世の情報將校で、サイパンで戦災孤兒の世話をしてゐましたが、將來、神學部へ進むといふ條件で、五人ばかりの孤兒に、ひきつづいて學費を支給してゐるのです」

「父は本人の四歳の時に死んでをりますから、ほとんど記憶がないのでせう。母といふのは、どういふ人ですか」

「東京女子大を出た才媛で、會社のデパートやクラブで働いてゐる女子職員の監督でしたが、その間、軍の囑託になつて、『水月』といふ將校慰安所を一人で切りまはしてゐました。非常な美人で……すこし美しすぎるので、女性間の評判はよくなかつたやうですが、島ではクイーン的な存在でした」

「慰安所の生活といふと、猥雑なものなのでせうが、本人はさういふ環境で成長期をすごしたのですね」

「さうぢやないのです。いまも申しましたやうに、母親といふのは、美しすぎるせゐか、なにかと氣が散つて、子供なんか見てゐられない、いそがしいひとなので、獨領時代からゐるカナカ人の宣教師に、預けっぱなしにしてありました」

「悪い影響はたいして受けてゐないとおっしゃるのですね」

「その方の知識は、全然、缺如してゐて、あの齡の少年なら、誰でも知つてゐるやうなことは、ほとんど知りません……一例ですが、映畫といふものを見たことがない。映畫については、幻燈が動く、といふ程度の概念しかもつてゐないのです。バイブル・クラスの秀才といったところで、日常を見てゐると、子供にしては窮屈すぎるやうで、かへつて不安になることがあるくらいです」

「考課簿の操行點も、『百』となつてゐましたが……でもねえ先生、私どもの方には、まるつきり反對な報告がきてゐるんですよ。こんどの事件は別にして、かんばしくないケースが相當かさなつてゐます……五月三日の夜、本人は女の子の假裝で……セーラー服を著て、赤いネツカチーフをかぶつてゐたさうですが、さういふ恰好で、銀座で花賣りをしてゐるところを、同僚につかまつて注意を受けてをります……こちらの地區では、基地のテント・シテイの入口でタクシーをとめて待つてゐて、朝鮮歸りの連中を東京へ送り込む……バイラーそつくりのことをしてゐますわ。それから、最近、泥酔徘徊が一件あります。十月八日の朝六時前後、相模線の入谷驛の近くの路線をフラフラ歩いてゐて、あぶなく始發の電車に轢かれるところでした」

一座が沈黙して、暫くは、枯野を吹きめぐる風の音だけが聞えた。

「先生は、長い間、本人を見ていらしたのですから、おっしゃるやうな子供だったのでせう」
婦人警官が慰めるやうな調子でいった。

「つまり、最近になって、急に性格が變つた……原因はなんであるか、想像が付きませんが、やつてゐることの意味は、いくらかわかるやうな氣がします。女になってみることに、泥酔してみることに、パイラーの眞似をしてみることに、火氣嚴禁の場所で火いちりをする……現れかたはそれぞれがひますが、禁止に抵抗するといふ點で、通じあふものがあるのですね……本人には、なにか煩悶があるのではないでせうか。たとへば、過去の思ひ出に不快なものがあつて、無意識に破壊を試みてゐるといった……さういふ點で、お氣づきになつたことはありませんか」

教諭はうなづきながら答へた。

「ご参考になるかどうか知りませんが、あれは、母親の手にかかつて、殺されかけたことのある子供なんです。麻紐で首を締められて、島北の臺地のパンの樹の下で、苔色になつてころがつてゐました……それにしても、ほどがあるので、首が瓢箪になるほど締めあげたうへに、三重に巻きつけて、神の力でも解けないやうに、固く細結こまびにして、おまけに、滑りがいいやうに、麻紐にベトベトに石鹼が塗つてあるんですね……むやみに腹がたつて、なんとかして助けようぢやないかといふことになつて、アダムスと二人で、二時間近くも人工呼吸をやつて、息が通ふやうになつてから、ジープで野戦病院へ連れて行きました……サイパンの最後の近い頃、三萬からの民間人が、親子で榴弾を投げあつたり、手をつないで斷崖から飛んだり、いろいろな方法で自決しましたが、さういふのは、親子の死體が密著してゐるのが普通で、子供の死

體だけが、草むらにころがつてゐるやうなのは、ほかにひとつありませんでした」

「辛い話ですな」司法主任が濕った聲をだした。

「母親に首を締められて殺されたといふ思ひ出は、戦争といふものを考慮に入れても、子供としては、たいへんな負擔でせう。ショックも、相當あとまで残るでせうし」

教諭が椅子から腰をうかしながらいった。

「あれは、どこにをりませうか。どういふことだったのが、よく聞いてみたいので……氣のついたこともありますから」

「かまひませんよ。いま、ご案内します」

どうぞこちらから、と婦人警官が左手の扉を指した。

太郎は保護室といつてゐる薄暗い小部屋の板敷に坐つて、巢箱の穴のやうな小さな窓から空を見あげながら、サイパンの最後の日のことを、うつらうつらと思ひうかべてゐた。

薄暗い部屋のやうすが、濕氣が、小さく切りとられた空の色が、おしつけられるやうな静けさが、熱の出さうな身體の疲れが、洞窟にゐたときの感じとよく似てゐる。

洞窟の天井に苔の花が咲き、岩肌についた鳥の糞が點々と白くなつてゐた。洞窟の口は西にむいてあいてゐるので、晝すぎまでじめじめと薄暗く、夕方になると急に陽がさしこんできて、奥の方に隠れてゐる男や女の顔を照らした。

骨と皮ばかりになった十四五の娘が、岩の窪みに落ちた米粒を一つ一つひろつては、泥を拭いて食べてゐる。そのむかうの氣違ひのやうな眼つきをした裸の兵隊は、オホハコベを口いっぱい頬ばり、唇から青い汁を垂らしながらニチャニチャ嚙んでゐる。さういふ人間どものすがたも、間もなくまた薄闇のなかに沈む。さうして日が暮れる。

「そろそろ水汲みに行く時間だ」

太郎は勇み立つ。洞窟に入るやうになつてから、一日ぢゆう母のそばにゐて、あれこれと奉仕できるのが、うれしくてたまらない。太郎は遠くから美しい母の横顔をながめながら、はやくいひつけてくれないかと、緊張して待つてゐる。

「太郎さん、水を汲んでいらつしやい」

その聲を聞くと、かたじけなくて、身體が震へだす。母の命令ならどんなことだつてやる。磯の湧き水は、けはしい崖の斜面を百尺も降りたところにあつて、空の水筒を運んで行くだけでも、クラクラと眼が眩む。崖の上に敵がゐれば、容赦なく狙撃ねらひちをされるのだが、危険だとも恐しいとも思つたことがない。水を詰めた水筒を母の前に捧げると、どんな苦勞もいっぺんに報いいられたやうな、深い満足を感じる。

あれは幾歳いくつのときのことだつたらう。ある朝、母の顔を見て、この世に、こんな美しいひとがゐるものだらうかと考へた。その瞬間から、手も足も出ないやうになつた。このひとに愛されたい、好かれない、嫌はれたくないと、おどおどしながら母の顔色をうかがふやうになつ

た……

太郎は頭のうしろを保護室の板壁にこすりつけながら、低い聲で暗誦をはじめた。

「旅人よ……行きて、ラケダイモンに告げよ……王の命に従ひて……我等、ここに眠ると」

最後の日に近いころ、母がひと區切りづつ口移しに教へながら、いくども復唱させた。

「ラケダイモンといふのは、スパルタ人のことなの。二千年も前に、スパルタの兵隊が、何百倍といふペルシャの軍隊とテルモピレーといふところで戦争をして、一人残らず戦死しました。その古戦場に、かういふ文章を彫りつけた石の碑があったといふんです……スパルタ人は偉いわね。あなただつて、負けちゃあるられないでせう」

母は親子二人のギリギリの最後を、歴史のお話とすりかへて夢のやうな美しいものにしようとしてゐる。

太郎は、「いよいよ死ぬんだな」とつぶやき、自分の死ぬところをぼんやりと想像してみた。眼の下の磯や斷崖の上から、親と子が抱きあつたり、ロープで身體を結びあはしたりして、毎日いく組となくひっそりと海に消えて行く、あんな風に母と手をつないで死ぬのだと思ふと、すこしも悲しくはなかった。

夕焼けがして、ふしぎに美しい夕方だった。母が六尺ばかりの麻紐を持って、太郎を洞窟の外へ誘ひだした。

「大勢のひとに見られるのは嫌でせうから、外でやってあげます」

首を締められて、一人で死ぬと考へたことはなかったが、あきらめて、母の氣にいるやうに、うれしさうに身體をはずませながら、けはしい崖の斜面をのぼって行つた……

婦警が迎ひにきて、太郎をいつもの刑事部屋へ連れて行つた。

板土間のむかうの一段高い疊の敷いたところに、ヨハネといふ綽名のある教師がゐた。サイパンにゐるときは砂糖黍畑の監督だつた。

太郎が膝を折つて坐ると、ヨハネはいつもの調子でネチネチとやりだした。太郎は神妙に頭を垂れたまま、板土間の机で書類を書いてゐる、警官の腰の拳銃を横眼でながめてゐた。

「あのピストルとおなじピストルだ」

洞窟にゐるとき、海軍の若い少尉が、胴輪のついた重い拳銃を貸してくれたつけ。

「お前は女の子のセーラー服を着て、銀座で花賣りをしてゐたさうだ」とヨハネがいつた。

「當り」……と太郎は心のなかでつぶやいた。ヨハネでも、やはり云ふときは云ふんだな。女の子に化けたのは、たつた一度だけだつたけど、誰から聞いたんだらう。あのときの婦警かしら。セーラー服を借りた二年A組のヨナ子がいやべつたのかもしれない。

「お前は他人の金で勉強するのが嫌になつた。それで、自分で學費を稼ぎださうと思つたんだね。先生は、お前の自主性にたいしては敬意をはらふが、花賣りをする事には、賛成しない」「外れ」……と太郎はまたつぶやいた。花賣りの恰好はしてゐたが、花なんか賣つてゐたんぢ

やない。ヨハネはなにも知らないのだと思ふと、うれしくなつてニッコリ笑つた。

母が銀座でバアをやつてゐることは、ホノルルで聞いて知つてゐた。

東京に著いた晩、すぐその店をつきとめた。子供が公然とバアに入つて行くには、花賣りかアコードオン弾きになるしかない。誰だつてすぐ考へつくことだ。毎日曜の夜、母の顔を見るために、花賣りになつてそのバアへ行つた。八時から十時までの間に、五回も入つたことがある。店があまり繁昌してゐないので、母は苛々^{いらいら}してゐた。

「しつっこいのねえ。いったい何度來る氣……うちには花なんか買ふひとゐないのよ」と甲高い聲で叱りつけた。その聲が好きだった。一度などは、女給に襟がみを掴んでつまみだされた。それでもかまはずに入つて行つた。

「お前は、毎土曜の午後、朝鮮から輸送機で著くひとを、タクシーで東京へ連れて行つた。アルバイトとしては、金になるのだらうが、お前の英語が、そんな下劣な仕事に使はれてゐたのかと思ふと、先生は情けなくなる」

「それは誤解」……アルバイトなんかしてゐたんぢやない。母のバアがあまりさびれてゐるので、すこしばかり賑かにしてやつたんだ。見えないところで、母の商賣に加勢することで、満足してゐたが、それはよけいなことだった。

十月の第一土曜日の夜だった。フィンカムの近くの、運轉手のたまりになつてゐる飲み屋へ車をたのみに行くと、顔馴染の運轉手がこんなことをいつた。